「男、突っ走る！」

第4回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（16）　中央高校1年2組生徒

門野　賢哉（16）　中央高校1年2組生徒

1　門脇家・全景（夜）

2　同・賢哉の部屋

賢哉が携帯電話で話している。

賢哉「え、木内が学級代表代理？」

3　木内家・雅也の部屋

雅也が携帯電話で話している。

雅也「うん。今日、安代ちゃんに会議室に呼ばれてさ。しかも稲森先生と佐藤先生もいて……とてもじゃないけど、この三人に言われたら断れないでしょ」

賢哉の声「いつまでやるんだよ」

雅也「代理ってことだから、結局光岡君が帰ってくるまでででしょ。けど、戻ってくるのがいつになってくることやら」

賢哉の声「まあ、安代の判断は正しいんじゃねえか。木内、結構そういうリーダー系向いてそうじゃん」

雅也「けどねぇ、光岡君はさ、陽気というか

怖いもの知らずで言いたいことズバズバ言うタイプでしょ。俺とは正反対だもん。それに、このクラスになってもうすぐ三ヶ月が経とうとしてるけど、俺、ほとんど喋ったことないんだよね」

4　門脇家・賢哉の部屋

賢哉「確かに木内とは全くキャラが違うもんな」

雅也の声「九割が男子っていうあのクラスの学級代表は、光岡君みたいなタイプの方が引っ張ってってくれると思ってたんだよ」

賢哉「引っ張るタイプじゃなくても、親みたいに見守ってくれるようなタイプのリーダーがあっても良いんじゃねえか？」

雅也の声「俺、見守るタイプかな？」

賢哉「少なくとも俺は、木内はそういうタイプだって思ってる。そうじゃなきゃ、俺とかきのしゅんとか志田と一緒にいられないだろ」

雅也の声「それは、みんなが素直だからだよ。まあ、光岡君がなるべく早く謹慎課題を終えて復帰してくるのを待つしかないね」

賢哉「まあ、頑張れや」

5　木内家・雅也の部屋

雅也「うん、俺なりに何とか頑張るよ。安代ちゃんもフォロー入ってくれるし。じゃあね（と電話を切ろうとする）」

6　門脇家・賢哉の部屋

賢哉「あ、木内」

7　木内家・雅也の部屋

雅也「（再び携帯電話を耳に当て）何？」

8　門脇家・賢哉の部屋

賢哉「夏休み、俺ん家遊びに来るか？」

9　木内家・雅也の部屋

雅也「え、良いの？」
賢哉の声「せっかくの夏休みなんだぞ。まさか、ずっと勉強してるつもりか？」
雅也「そりゃ、夏休みの宿題だってあるしさ、まあ中学と違ってどういう夏休みの課題が出るかは分からないけど」
賢哉の声「まあ、勉強のことは忘れて、まずは俺ん家来いよ」
雅也「うん、分かった。また遊べる日、調整しょう。じゃあ、また明日。（と電話を切ると）かどけんの家かぁ」

10　線路を走る電車

11　その電車の中

座席に座って、車窓から景色を見ている雅也――山と川、田んぼと畑に囲まれた長閑な景観である。
N「夏休みに入り、僕はかどけんの家に遊びに行くことになりました。かどけんの最寄

駅は、僕の家から車で十分ほどのところにある駅から電車で一区間のところです。僕の地元は海に囲まれた漁師町ですが、かどけんの家は山に囲まれた自然豊かな田舎町でした」

12　賢哉の最寄駅

改札口がない、ホームだけの造り。

賢哉がベンチに座っている――電車が到着し、中から雅也が降りてくる。

賢哉「よ」

雅也「この電車、小さい時以来久しぶりに乗った」

13　門脇家・表

雅也と賢哉がやってくる。

賢哉「ここが俺ん家」

雅也「ここなんだ。すぐ先にあるスーパー、よく買い物に行くんだよ。だからこの道よく通るんだよ。まさか国道沿いのここだっ

たなんて」
賢哉「まあ、あがれや」
雅也「うん、お邪魔します」

14　門脇家・賢哉の部屋

物珍しそうに眺めている雅也――賢哉がジュースを運んでくる。

賢哉「ほい、ジュースだ」
雅也「ああ、ありがとう」
賢哉「そんなに珍しいか？」
雅也「いや、中学校の時も勉強や部活で、なかなか友達の家に遊びに行くことなんて数え切れるぐらいしかなかったんだよ。それに遊ぶといっても、友達の家に集合してそこから公園とかに行くことがあったから、友達の家に行って何かをするっていうのがあんまりなかったんだよね」
賢哉「友達の家に行って、何してたんだよ」
雅也「小学校の時とかだと、最初は一緒に勉強して、そのあとはトランプとか人生ゲー

ムとか、テレビゲームとか、いろいろやってたよ」

賢哉「勉強しかやってないんだな」

雅也「別に勉強したって、成績は極端に良いわけじゃなかった。中学の時なんて、学年で半分行くか行かないぐらい。頭の良い人なんて山ほどいたんだから」

賢哉「まあ頭が良かったら、俺と同じ今の高校には行かないよな」

雅也「今の高校選んだのは、自転車で二十分で行ける地元だったことと、パソコンが学べる普通科の情報コースがあったから」

賢哉「じゃあ、特別にこの学校でこれがしたい！っていう目的とかは、特になかったんだ」

雅也「まあね。高校なんて、どこでも通えればいいかなって。でもあの高校に入って良かったって思ってるよ。そうじゃなきゃ、かどけんと出会うこともなかったわけだし」

賢哉「何か、嬉しいこと言ってくれるじゃん」
雅也「入学式が終わった後の数日は、絶対に前の席の人とは友達にならないって思ってた。けど週が明けて、俺に声かけてきてくれたでしょ？　最初は驚いたけど、嬉しかった」
賢哉「早いな、もうあれから四ヶ月近く経ったんだもんな」
雅也「うん。今じゃ、一番携帯電話で話す相手になったし」
賢哉「どうなんだよ。例の学級代表代理のほうは」
雅也「何とかできてるよ。別にリーダーだからって、みんなの前で何かまとめるっていうことも特にないし」
賢哉「そっか」
雅也「それよりも気になったのは、かどけんの無断バイトだよ。あまり学校じゃバイトの話はしないほうが良いと思って言わなかったけど、きのしゅんと一緒にバイトし

てるんでしょ」
賢哉「ああ」
雅也「バレて面倒なことになる前に、生徒指導部にちゃんと申請出したら？」
賢哉「書類出しても、なかなか許可されないんだよな。それが嫌でみんな無断バイトするんだから」
雅也「そんなに厳しいの？」
賢哉「結構却下されてるやつ多いらしいぞ。だからみんな無断バイトしてるんだよ」
雅也「なるほどねぇ……安代ちゃんが前に言ってたじゃん。優先すべきは学業だって。俺、納得しちゃったんだよね、その言葉に」
賢哉「お前は真面目だもんな」
雅也「かどけんのバイトがバレてごらんよ。芋づる式できのしゅんもバレて、二人とも謹慎処分になっちゃったら寂しくなるでしょ。いくら志田とか、良樹とかかっちゃんがいたってさ、やっぱりかどけんやきのしゅんもいないと、二組の意義がないもの」

賢哉「意義って何だよ」

雅也「俺は、あくまで学級代表代理だから別にクラスの手本になろうとかとは思わないよ。でもさ、やっぱり最低限の学校のルールは守らなきゃいけないって思うんだよね。そりゃ、中には理不尽なものだったり、何でこんなこと守らなきゃいけないんだって思うかもしれない。でも、そういうルールがあるのを分かって高校に入ったわけでしょ。それに従えずに謹慎処分になったり、そのまま学校が嫌で退学するんだったら、それは自業自得だと思うんだよね。誰に言われたわけでもない、自分がルールに反したんだもん。謹慎処分だって、軽いと思ってるかもしれないけど、回数が重なれば今後の進路にだって影響するかもしれない。謹慎中に逆に学校に行くことが嫌になってそのまま辞めるようなことだって……。正直、他の人は別にどうだって良いの。ただ、かどけんやきのじゅんには、

そうなってほしくないから、だから言うの」
賢哉「お前って、本当に良いやつだな」
雅也「え？」
賢哉「小学校の時も中学校の時も、一緒にバカみたいに遊ぶやつはたくさんいたよ。でも、進路だとか学校生活だとかって、心配してくれるようなやつはいなかった。多分、俺の周りは別にそういうことを気にしないやつばっかりだったんだろうな。けど木内はこれまで会ってきたタイプとは全然違う。遊ぶことだけじゃなくて、俺自身のことを気にしてくれてるんだよな」
雅也「小うるさい奴だって思ってるかもしれないけど、少々うるさく言わないとどうしようもないなって思うから言うんだよ。そりゃ、最終的にちゃんとバイトの申請を生徒指導部に出すのかはかどけんが決めることだからね。けど、俺の思いを分かってほしかったから」
賢哉「言われなくても、木内の思いは分かっ

てるさ。一学期の約四ヶ月、ほぼ毎日顔合わせてきたんだ。お互いの性格だって分かってきた。だからこうやって友達ができてるんだと思う。これが、ただの生真面目でおもしろい要素もなくて、嫌味ったらしい奴だったら、俺今頃殴ってるぞ」

雅也「かどけん……」

賢哉「でも木内はそういうタイプじゃないっていうのが分かってるから、説得力があるんだよ。だから安代も、お前なら学級代表代理をお願いできると思ったんじゃないか？」

雅也「そうかなぁ」

賢哉「それに、俺嬉しかったんだぞ。学級代表代理が決まった時、すぐ俺に電話かけてきてくれて」

雅也「あの時は、何故かかどけんにかけちゃったんだよね。相談しやすかったというか、自分でもよく分かってないんだけどさ」

賢哉「普段は俺からかけることが多いから、

たまにそっちから電話かかってくると何事かって思うからな」

雅也「かどけんが俺に電話してくるときは、大体時間割とか学校の業務連絡のことばっかりだもんね」

賢哉「しょうがねえだろ。お前だけが頼りなんだから」

雅也「俺も、今日かどけんが遊びに誘ってくれたこと、嬉しかった」

賢哉「そうか」

雅也「夏休みは特に大きな予定もないし、部活だってコンピュータ部は毎日あるわけじゃないから。パソコン使うから、基本先生の予定に合わせて部活のありなしが決まるんだよね」

賢哉「羨ましいな」

雅也「さすがに、野球部は平日基本的に毎日だもんね」

賢哉「俺さ、そろそろ野球部やめようと思ってるんだよね」

雅也「え、何で？」
賢哉「疲れたんだよなぁ」
雅也「どうしちゃったの？」
賢哉「別に、野球に専念しなくても良いかなと思って。中学時代に散々やって、エースまでやったんだ。これ以上、野球に力入れる必要もないかなと思ってさ」
雅也「元々運動が苦手で運動部の環境に合わずに辞めるっていうなら分かるけど、かどけんは今でもゴリゴリに運動できるんだもの。それに、野球部辞めてどうするの？」
賢哉「コンピュータ部でも入ろうかな」
雅也「え、うちの部活に来るの？」
賢哉「ダメか？」
雅也「別にダメではないけど、野球部のエースやったかどけんがコンピュータ部って、逆にこっちのほうが合わないと思う」
賢哉「楽そうじゃん、文化部だもん」
雅也「そりゃ野球部と比べたらね。怪我するようなこともないし、室内の部活だからこ

の時期日焼けすることもない。でもね、今コンピュータ部はパソコンの資格取得の勉強やってる最中なんだよ。ちゃんと検定料払ってるから、みんな合格しようとパソコンの知識の勉強から、技術の勉強までやってるの。いくら普通科情報コースで、普段の授業でパソコンやってるって言っても、それよりもハイレベルな勉強やってるんだよ。とても、かどけんがついていけるとは思えないけどなぁ」

賢哉「検定の参加は、別に強制じゃないんだろ？」

雅也「まあそうだけどね。でもみんな資格を取りたいから、テキスト見ながら勉強してる。一人だけ検定受けずに、ただパソコンさわって終わりっていうことにもなるかもしれないんだぞ」

賢哉「そこまで言うなら、俺も検定勉強するさ」

雅也「え、かどけんが検定勉強？　台風でも

来るんじゃない？」
賢哉「（苦笑して）失礼な。大丈夫だよ、分からないことがあったら、全部木内に教えてもらうから」
雅也「俺？」
賢哉「こういう知識、詳しいだろ？」
雅也「まあ、中学の時に四級は取ったけど」
賢哉「すげえな」
雅也「本当は三級も取ろうと思ったけど、あとちょっと点数が足りなくて結局諦めたの。だから今はその三級に向けて、勉強してるところ」
賢哉「難しいのか？」
雅也「まあ、ある程度の知識がないと無理だろうね。分かる知識もあるし、カタカナばっかの専門用語とかは、似たような言葉があるからなかなか覚えるのも苦手で」
賢哉「木内が苦手なら、俺はもっと無理だろうな」
雅也「だから勉強してるの。俺が中学のとき

に四級取れたんだ。内容的には、今の情報の授業と同じような感じだから、まずは四級から受けてみたら？」

賢哉「それも良いかもしれないな」

雅也「競艇の実況見たり、アイドルの握手会行ってる暇があったら、少しはこういう勉強してみても良いんじゃない？　たまには違うことしてみるのも良いかもよ」

賢哉「だな。木内は握手会行かないのか？」

雅也「俺は、親からお小遣いもらってないし、バイトもしてないから、そういう娯楽にお金かけてないの。趣味の読書だって親にお願いして買ってもらってるものがほとんどだから、俺はあまりお金をかけずに趣味を楽しんでるの」

賢哉「へえ。だから、こういう真面目な人間になるんだろうな」

雅也「そうかな。（と苦笑すると）でも、テレビは好きだし、アイドルも好きとまでは言わないけど、テレビ見て『あの子可愛いな』

ぐらいは思うよ。ＡＫＢも、最近分かるようになってきた」

賢哉「誰推しなの？」

雅也「俺はともちん推し」

賢哉「俺は、さえだな」

雅也「ああ、何となく分かる」

賢哉「そうだ。ＣＤと雑誌、持ってくか？」

雅也「え、良いの？」

賢哉「握手券とか特典がほしくて、同じやつをいくつか買ったんだよ。（と棚からＣＤと雑誌を取り出すと）ほらよ」

雅也「本当に良いの？　いくらか出そうか？」

賢哉「良いんだって、気にするな。いつも勉強だって固いこと言ってるのに、今日はこうして俺ん家に来てくれた。学校じゃ時間が限られてるし、他のやつもいるからゆっくり話せないこともある。こんなに腹割って話せたんだ。ＣＤや雑誌の一枚や二枚、どうってことないさ」

雅也「そう……ありがとう」

と、物珍しそうにＣＤや雑誌を眺める。
賢哉「そんなに珍しいか？」
雅也「アイドルのＣＤとか雑誌なんて買ったことなかったから」
賢哉「どうせあれだろ？　お前がいつも買う本は、大体小説とかドラマのノベライズ本だろ」
雅也「うん。だから、貴重だなと思って。これ、大事にするわ」
賢哉「そんな大げさな（と苦笑する）」
雅也「だって嬉しいんだもん。友達からＣＤとか雑誌なんてもらったことないから」
賢哉「多分、これからもＣＤは増えてくから、その時はやるよ」
雅也「マジ？　アテにしちゃうよ？」
賢哉「いくらでもアテにしてくれ。その代わり、検定勉強教えてくれよ」
雅也「任せといて。いくらでも教えてあげる。せっかく受験するんだもん、ちゃんと合格してほしいから」

賢哉「合格できるかなー」
雅也「それは、かどけんのやる気次第だよ。
俺が一生懸命教えたって、かどけんがちゃんと学ぶ気がなかったら、どんなに勉強しても合格はできないんだからね」
賢哉「はいはい。木内にケツ叩かれながら、頑張るよ」
笑い合う雅也と賢哉。
N「結局この日、僕はほぼ一日かどけんの家でお世話になりました。高校に入って初めての夏休みに、とても思い出に残る良い出来事となったのでした」

つづく